

おわりに

正寿寺に所蔵されている六字名号は蓮如の筆と認めることができることから、室町時代に浄土真宗との関係ができたことを物語っている。そしてその後深江において念仏の信仰が守り継がれていくこととなったのである。

註

- (1) 浄土真宗本願寺派総合研究所編『浄土真宗辞典』（二〇一三年、本願寺出版社刊）。
- (2) 「蓮如上人一語記」（『大系真宗史料〈文書記録編〉7 蓮如法語』二〇一二年、法藏館刊）。
- (3) 「第八祖御物語空善聞書」（『大系真宗史料〈文書記録編〉7 蓮如法語』二〇一二年、法藏館刊）。
- (4) 『大系真宗史料〈文書記録編〉13 儀式・故実』所収（二〇一七年、法藏館刊）。
- (5) 『真宗重宝聚英第一巻 名号本尊』（一九八七年、同朋舎刊）では、蓮如・実如・証如の筆による六字名号が掲載されているが、区別が困難であるとされている。
- (6) 『同朋大学仏教文化研究所研究叢書1 蓮如名号の研究』（一九九八年、法藏館刊）。
- (7) 本願寺史料研究所編『図録 蓮如上人余芳』（一九九八年、本願寺出版社刊）に、室町時代後期の本願寺系六字名号に使用されている料紙の化学分析の結果が報告されている。
- (8) 本願寺史料研究所保管。

（本願寺史料研究所上級研究員）

江戸時代の正寿寺（3）

本山から授かった

歴代門主の真影

史料館長 大 国 正 美

はじめに

「本庄村史編纂 寺院の分二十三枚」という表紙のついた手書き原稿がある。これは昭和十七年から本庄村史の編纂を手掛けた郷土史家松田直市が残したもので、元本庄村職員だった岡田博達氏から昭和五十五年七月二十八日に寄贈された史料である。「本庄村誌」の原稿の一部として書いたものと推察される。この中に正寿寺が、西本願寺から門主や高僧の真影を繰り返し入手した記録がある。正寿寺が願主となり、檀家が寄進した記録も含まれる。真影は戦災ですべて失われており、江戸時代の本山と正寿寺、ならびに檀家とのつながりの歴史を明らかにする貴重なデータともいえる。

本庄村誌編纂の嘱託松田直市の遺稿

この記録を残した松田直市は、明治十八年（一八八五）に旧中野村の名望家松田安右衛門家の分家松田直左衛門家に生まれた。御影師範学校を修了、西宮第一小学校、精道小学校（芦屋市）、武庫尋常高等小学校で教壇に立った¹⁾。四七歳で退職して昭和七年から御影町誌・本山村誌・魚崎町誌・武庫村誌の編

纂に関わった。昭和十七年に本庄村嘱託となり、村誌編纂に着手したが昭和十九年死去した。

松田直市は精力的に古文書を筆写、八冊の「本庄村誌資料」を残した(当館蔵、うち六巻は欠落)。その史料の中に今回取り上げる「本庄村史編纂 寺院の分二十三枚」は含まれていないが、癖のある松田直市の筆跡に間違いはない。寄贈した岡田博達氏は松田直市の三男で本庄村職員になっており⁽²⁾、何らかの事情で父の遺稿が手元に残ったのだろう。

さてこの原稿は、「由緒」「梵鐘鑄造」「堂宇」「明治時代の本山」に続いて当時所蔵の宝物一覧を記載している。

正寿寺開基に関する松田直市の解釈

正寿寺の開基については、中世の真言宗の薬王寺から、文明十三年(一四八一)蓮如に帰依して浄土真宗に改宗、延寿寺となったとされている。寛永十年(一六三三)に現在地に移り、寛永十九年に本山から寺号を受けて正寿寺となった。その時の住職は空照(正寿寺の記録では空昭)と名乗り、開基となったというのが通説になっている⁽³⁾。

ところが松田直市が筆写した元禄五年(一六九二)の「杜寺吟味帳」では、慶長年間に本山より木仏寺号を受けたこと、時の住職は了順で、了喜―正円と続き、空照は四代目看坊と届けている⁽⁴⁾。この食い違いについて、注(4)の前稿では空照は自らは四代目と名乗ったが、後世に開基としたと推測した。

松田直市は、空照自身が四代目と名乗っていたことを踏まえ、たとえば、空照が「本山より木仏寺号を許可せられ永井山正寿寺と改めた。因て当寺に於ては空昭を以て開基と定めた」と、

筆者の前稿と同様の解釈をしている。やはり空照自身は四代目と名乗っていたのに、後世に空照を開基に持ち上げたのだろう。正寿寺の住職の記録でも「伝灯行化五十三年」と書いていて、半世紀もの間住職をしていたとしている。

宝物の概要

「本庄村史編纂 寺院の分二十三枚」に書かれた宝物一覧の最初の部分二点を引用する。

法宝物

釈 良如御華押⁽⁵⁾

親鸞聖人真影 寛永十九載壬午十二月十七日

常楽寺門徒撰津国菟原郡本庄深江村

惣道場正寿寺

釈 本如御花押

蓮如上人絵像 文化元甲子年三月六日

常楽寺門徒撰津国菟原郡深江村

正寿寺物 願主釈理円

この宝物一覧表をどう読み解いたらいいか。登場する人物を整理してみたい。一行目の良如は寛永七年(一六三〇)、西本願寺一三世門主となり、寛文二年(一六六二)に示寂した。すなわち寛永十九年十二月十七日親鸞の御真影が正寿寺に授与され、その当時の門主の良如の花押が押してあったという意味と解釈できる。続く蓮如の絵像は文化元年(一八〇四)三月六日に授与されたもので、本如の花押が押してあったという意味ととれ

表 正寿寺に西本願寺より授与された真影等

授与年月日	西暦	表 題	授与者	願主
寛永 19 年 12 月 17 日	1642	宗祖親鸞聖人真影	13 代良如花押	正寿寺
正保 4 年 2 月 25 日	1647	12 代准如上人真影	13 代良如花押	正寿寺
貞享元年 11 月 29 日	1684	13 代良如上人真影	14 代寂如花押	正寿寺
享保 12 年 12 月	1727	14 代寂如上人真影	15 代住如花押	正寿寺
明和 4 年 3 月 12 日	1767	16 代湛如上人真影	17 代法如花押	7 代恵音
文化元年 3 月 6 日	1804	8 代蓮如上人絵像	19 代本如花押	8 代理円
文化 6 年 2 月 29 日	1809	大谷本願寺親鸞聖人縁起	19 代本如花押	8 代理円
文化 8 年 11 月 18 日	1811	18 代文如上人真影	19 代本如花押	8 代理円
文政 11 年 5 月 14 日	1828	19 代本如上人真影	20 代広如花押	9 代円乗

る。本如は寛政十一年（一七九九）、門主となり文政九年（一八二七）に示寂しており、これも年代があう。

このほかに授与された絵像を年代順に整理し、願主を付記したのが、表である。なお享保一二年の寂如の真影は玄了ら四人、文化八年の文如の真影は道専ら十人の檀家の寄進によるものである。

まず指摘できるのは親鸞や蓮如など正寿寺にとって特別な存在である例を除けば、基本的には先代の門主の真影に次の門主の花押を押してもらい受けるというのを基本にしている。ただ一六代湛如と一八代文如の花押の押した真影は欠けている。

第二に、六代目までは願主は正寿寺とだけあるが、七代目以降、住職の個人名になっている。前号で報告したように七代目の恵音が天明六年（一七八六）本堂を建立し、中興開基とされる。それまでの村の共有の寺から、自庵としたため住職が願主となって申請し、授与されるようになったのだろう。

第三に、次の八代目理円の時대에宗祖親鸞の絵伝と、浄土真宗に改宗した際の蓮如の真影を受け、さらに先代門主の真影を受けている。本山と檀家との関係を強め、理円は西本願寺の院家・内陣・余間に次ぐ格式である三之間に就任した。この三之間は、西本願寺の御堂の余間の外にあり、仏事に仕出した際、三之間に着座して勤行を行うことをさした。

おわりに

七代恵音は住職にあること二四年にわたり、寛政八年（一七九六）に理円に住職を譲り、寛政九年に遷化した。逆算すると安永二年（一七七三）ごろから住職を務めた。八代理円はいつまで住職だったのかは未詳だが、弘化三年（一八四六）八月に遷化している。恵音が本堂を建て、次の理円が親鸞や蓮如の真影を本山から授かり、また本山での地位向上も果たしたのである。一八世紀後半から一九世紀前半に正寿寺は大きく繁栄し、本山と関係を強めた時期にあたること、失われた宝物の記録からも明らかにできる。

（1）大国・樋口元巳「本庄村誌囑託 松田直市」『生活文化史』四号、二〇一六年。

（2）大国「解村時の本庄村職員」『生活文化史』三七号、二〇〇九年。

（3）森口健一「正寿寺と大日神社」『生活文化史』五〇号、二〇二二年。

（4）大国「江戸時代の正寿寺（1）新史料「社寺吟味帳」から」『生活文化史』五一号、二〇二三年。